

建設時評

高橋是清と日銀本店

財団法人 建築コスト管理システム研究所

主席研究員 岩松 準

時評というには古い時代の話で恐縮である。ただ昨年末のNHKスペシャルドラマ放映で司馬遼太郎原作の「坂の上の雲」が話題になったのでお許しいただきたい。

このドラマでは、主人公の正岡子規と秋山真之（日露戦争で活躍した海軍中将）が明治16（1883）年、旧制愛媛一中（現・松山東高）を相次いで中退して上京し、受験勉強のため共立学校（現・開成高）に入学後、英語教師に連れられ横浜居留地の見物にくる場面がある。この教師はのちに「だるま宰相」とあだ名される有名な高橋是清である。ただ、氏の自伝によると、東京大学予備門英語教員兼務ではあったが、すでに明治14年から文部省御用掛に転じていたので、このドラマの設定は多少怪しい気がする。

* * *

高橋是清（1854-1936）は、二・二六事件で青年将校の凶弾に倒れた大蔵大臣（元総理大臣）である。一度読むと面白くて止まらない自伝を読むと、「坂の上の雲」が描く当時の雰囲気生き生きと伝わるし、本当に波瀾万丈の人生だったことがわかる。

安政元（1854）年に江戸で幕府御用絵師の私生児として生まれ、すぐに仙台藩足軽の里子・養子となる。藩命により12歳で横浜に洋

学修行に出され、慶応3（1867）年14歳の時に渡米するが、だまされて奴隷となり、明治維新で帰国。17歳で唐津英学校の教師をつとめてからは、大蔵省駅逓寮十等出仕（翻訳係）（19歳）、東京英語学校教師（23歳）、長野県での養牧業への出資と失敗、翻訳業...と職業を転々とした。その後は、文部省御用掛（28歳）、農商務省工務局（同）、商標登録所初代所長（30歳）、専売特許所長兼務、特許制度の欧米視察旅行（31歳）、特許局長（33歳）と順調に官僚キャリアを積んだが、それを中断して明治22年に赴いたペルーでの銀鉱山事業は失敗し（36歳）、家屋敷を売り払う羽目になった。帰国後の不遇時代に川田小一郎日銀総裁に声をかけられ、日本銀行の事務係で採用され（37歳）、やがて正社員となる。その後は横浜正金銀行本店支配人（41歳）、日銀副総裁（44歳）、貴族院議員に勅撰（50歳）、男爵（53歳）、第7代日銀総裁（56歳）、大蔵大臣（58歳）、政友会入党（同）、子爵（66歳）と上り詰め、ついに大正10年11月の原敬暗殺の後に、第20代総理大臣（大蔵大臣兼務）、政友会第4代総裁（67歳）となった。その後、貴族院から衆議院に転じ（69歳）、農水大臣、大蔵大臣等を歴任し、ついに昭和11年2月26日に赤坂の自宅で暗殺された。享年82歳。

* * *

顔が丸いのとこのような経歴から「七転び八起きのだるま宰相」といわれて国民から愛された。明治38～39年の日露戦争では、日銀副総裁として、留学時代の人脈でロンドンでの外債発行による戦費調達に活躍したことや、昭和2年の昭和恐慌時には、蔵相として井上準之助・日銀総裁と協力し、数日銀行取引を全面的に止めて、その間、片面印刷の200円札を大量に発行して銀行店舗に積み上げさせ、預金者を安心させて金融恐慌の沈静化を図ったことなどのエピソードが伝わる。

しかし、高橋是清が建築とも因縁深い関係を持つことは、知られていないかもしれない。

* * *

一つは、唐津の英学校耐恒寮の教師時代に、

辰野金吾（1854-1919）・曾禰達蔵（1853-1937）という日本建築界の先覚者の教育に携わっていることである。高橋の教育方針は「一切教室では英語で教えて、日本語は一切使わせなかった」というようなものだった。

不思議な縁があるもので、曾禰はのちに高橋の妹を妻とした。また、高橋がペルー銀山事件で失敗した後、日銀本店の建築所事務主任として再出発するが、その時、総監督・安田善次郎（のちに安田財閥を築く人物）の下で、元教え子の辰野金吾が技術部監督をしていたのだ。辰野は工部大学の初代卒のエリートで、今日の建築学会の創設に関わった人でもある。代表作は戦災前への復元改修工事が進む東京駅舎（大正3年竣工）であるが、若い時代の設計作品の一つが、日本銀行本店（明治29年竣工）である。

* * *

これは、上空から屋根の形を見ると「円」の字をデザインしたのでは、という流説もある建物で、お札にも描かれたことがある石造の重厚なつくりだが、純粹の石造は1階部分だけで、2階以上は煉瓦造に石を貼付けている。当時の川田日銀総裁の注文で石造建築となったが、着工後、明治24年10月に濃尾地震（明治時代最大の被害）が発生した。辰野は「上になるほど重量の軽いものを使わなければ危険である」という判断で、「2階には石の代わりに普通の煉瓦を使い、3階はそれより一層軽くするために穴あき煉瓦を使う」ことにしたが、川田総裁は外観の問題から、それを承知しなかった。自伝によれば、「心を煉瓦にして、外側だけを薄い石で貼り付けた



建設物価 / 2010・3月号

らどうだろう？」と高橋が車上で思いついたらしい。この提案について辰野は、問題になっていた工程進捗の遅れや予算オーバーを取り戻す妙案とあって賛成したという。この案は高橋の仲立ちで無事、総裁の承認を得た。これは今日の「施工時VE」といえよう。

また、当初は大倉組の請負だったというが、4名の下請石工親方に手こずり、本工事の工期とコストの問題の原因になっていた。高橋は総裁を口説いて、「大倉組との契約を解き、事務所が直接に石工の親方と契約を結び、4人の親方に四角い建物の一角ずつを請負わせ、期日に遅れた者からは1日500円の罰金を取り、期日前に仕上げた者には、同じく1日500円の割にて賞与金を出すことに致したい」という案を承知させ、同盟していた親方達を競争させることに成功して、工事は好結果となったという。巧みなコンストラクション・マネジメントとはいえないか。

* * *

高橋是清と建築とのもう一つの関係は、建築統計を巡るもので、物価調査機関とも関係がある。『随想録』や建築学会文献によると、建築統計のきっかけを作ったのは高橋だった。晩年の国会演説でもあったようだが、その内容は、石橋湛山（当時・東洋経済主幹）との経済清談という記事の「建築費統計が欲しい」という項に詳しい。「世の中で、家の建築ほどすべての生産に広く関係を持つものはない。それでその状態が知りたいのだが、日本にはこの統計が無い」。高橋は不況を克服するための経済計画の立案に建築投資の大きさの把握が不可欠なことを説いたのだった。これが商工省建築統計の作成につながり、また、演説を聴いた当時の建築学会の重鎮・横河民輔（1864-1945）を動かして、建築関係5団体による建築統計聯合委員会の本格的建築統計の整備につながった。今日の国交省等が取り組む建設統計や、建築コスト物価版の言い出しっぺは高橋是清といえるのである。

参考文献

- 『高橋是清自伝（上・下）』中公文庫
- 『高橋是清 随想録』1999年再版、本の森